

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	チェコ語訳聖書のFSP構造 : その歴史的変化
Author(s)	本城, 二郎
Citation	ニダバ , 28 : 9 - 18
Issue Date	1999-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048041
Right	
Relation	



チェコ語訳聖書のF S P構造

— その歴史的変化 —

本 城 二 郎

1. 序論：チェコ語文法の歴史的変化とF S P（機能的文構成）の要件

チェコ語は、完了を表わす複合分析過去（←古スラブ語のアオリスト・不完了過去）や未来を表わす新しい複合分析未来、新しい複合分析受動（←ラテン語）と伝統的再帰受動（←古スラブ語）の併用や（複合形としての）条件法、さらに法（助）動詞・述語・小詞の分化など、スラブ語でも特異な分析的形態法を発達させており、他方、統語法の面では、前倚辞としての助動詞要素の文第2位置固定および他の要素の可動位置による相対的自由語順により、所謂F S P要件（文要素のTh-Rh構成）を実現してきたことが知られている。本論では、前者における文要素の分割性、それに後者におけるモダリティ付加、および両者の相関関係を、F S P実現の観点から位置づけ、それらの歴史的変化を（意味的等価な）聖書訳テキスト中より特徴づけることを試みる。

2. F S PとE A S P（喚情的文構成）の相互関係

2. 1. F S Pの基本構造と喚情性

発話としての文は、言語外現実に対応すべく、伝達機能の要件を満たすと考えられる。具体的には、文要素をTh-Rh分割し、Th-RhまたはRh-Th語順を実現することにより達成される。チェコ語では、両語順が無標vs有標のみならず非喚情性vs喚情性の対立をも実現し、語順におけるFSP線条性原則vs喚情性原則の対立の存在を保証している。

無標・非喚情文：Th(eme)－Rh(eme) ↔ 有標・喚情文：Rh(eme)－Th(eme)

/FSP線条性原則/ Dostal pětku i ze čtení. /喚情性原則/ I ze čtení pětku dostal.

取った 5を さえ から リーダー

Th Rh +/(主語に対する)否定的態度/ Rh Th

2. 2. F S P基本概念の定義

文要素のTh-Rh分割としてのFSP要件は、必ずしも語順のみならず、（上記の如く）小詞付加や（動詞に顕著な）意味構造・関係や文脈（、話言語ではIntonation Center）によっても実現される。その際Th, Rh要素はさらに細分化され、各自情報価値を担い、文全体の伝達を達成すると考えられる。情報価値のことをC(ommunicative)D(ynamism)、その大小の度合をCD度、CD度の漸進的上昇を示す配列をCD基本配列とし、一つの体系を構

成する原理として定義し直したのがFirbasのFSP理論である。以下にF S P要素とその基本配列をあげ、理論を概観する。

CD基本配列 ⇨ ThPr<ThPro<Th<DhTho<DhTh < TrPr<TrPro<Tr < Rh<RhPr
 / Th-領域 / / Tr-領域 / / Rh-領域 /
 テキストTh ↓ +/文脈ネグサス/ → +/Th-Rhネグサス/

2. 3. F S P 概念と発話分析への適用

CD度の決定には、(書き言語で)関与的と見なされる次の3つの要因の階層的優位関係がある:線条性<意味<文脈。最上位の文脈が働かない条件下、つまり文脈独立では、線条性と意味との相関関係には以下のような2タイプが設定可能となる。

1. Set-Pr(of Appearance/Existence)-Ph(Appearing/Existing)

: P h スケール (現象スケール) SetでPhがPrになる。

2. Set-B(of Q)-Q(permanent/transient)-Sp-FSp

: Q スケール (属性スケール) SetでBが(FSp&Spを)Qする。

統合スケール ↓

Set-Pr-Ph=B-Q-Sp-FSp SetでPhがPrになり、(FSp&Spを)Qする。

例文: V jedné zemi žil starý král.

Set, DTh +;Pr, TrPr Ph, RhPr

Ten král měl tři syny. Jeden byl nemocen asi dvanáct let.

B, DTh +;Q, Tr Sp, RhPr B, DTh +;AofQ, TrPr Q, Rh Sp, RhPr

(注) 記号はFirbas(1992)に依拠:

Set(ting);Pr(Presentation);Ph(Phenomenon);B(earer);Q(uality);Sp
 (Specification);FSp(Further Specification);Th(Theme);ThPr(Theme Proper)
 ;DTh(Diatheme);Tr(Transition);TrPr(Transition Proper);AofQ(Ascription of
 Quality);Rh(Rheme);RhPr(Rheme Proper);+(Th-Rh Rinkage)

3. チェコ語 F S P 構造の歴史的変化

3. 1. 要素分割性による F S P 構造の変化

3. 1. 1. 一要素文と二要素文における F S P 構造

要素分割性と動詞性vs名詞性対立という2種類が文の形式的構成に関与的な特徴で、スラブ語の文タイプ(慣用的文構造)を決定していることはよく知られている。ここでは、形式的な主語-形式的述語により分割・構成される形式的文構成に対し、実際の発話文脈の中での機能により再分割・再構成(つまり修正)される機能的構成としてのF S P構造の具体例分析が検証される。印欧語の文構造の歴史的変化をみると、形式的・文法的な主語として名詞、それに呼応・一致する形式的・文法的述語として動詞、の2つの文法カテゴリーが成立・発展してきたことが推論されている。その場合、2分割形式つまり二要素文は、直感的にも自明のように、極めて汎用され一般化されているのに対し、非

分割形式、つまり一要素文は、一見頻度が低く、その文的特点から特殊・不完全なもの
と見なされてきた。しかし、話言語や方言が示すように、一要素文も独立した文タイプ
と見なす必要があると考えられる。歴史的には、他のスラブ語と同様、チェコ語も古く
は一要素文と見なされるものが頻用されていたし、現在でも文法的と見なされているも
のも確認されている。その場合、要素カテゴリーの種類、つまりその動詞性vs名詞性
という特徴が関与的であると考えべきで、そのような特徴の組み合わせが如何にF S P
構造、つまり文のTh-Rh分割と対応し、(文型のみならず)発話としての文を成立させ
ているのかを、チェコ語の歴史的テキストである聖書の時代別訳本の平行分析を通じ明
らかにすることを試みる。

チェコ語の文タイプ I : 要素分割性による分類

文タイプ (= 文型)

/要素分割性/=主語述語シタグラマ: 一要素文

二要素文

/Th-Rh性/:

一要素Th文 一要素Th-Rh文
(欠如タイプ) (抱合タイプ)

一要素Rh文
(省略タイプ)

Th-Rh文 (/Rh-Th文)
非喚情文 喚情文
(安定タイプ)

/動詞性vs名詞性/

? 一要素名詞Th文

一要素Th(定動詞の人称語尾)-Rh(定動詞)文

一要素動詞述語Rh文

無動詞Th-Rh文: 名詞Th-名詞Rh文

* 一要素動詞Th文

PGNE

(省略・モーダルタイプ) > 命令文

(臨時タイプ) 名詞Th-形容詞/副詞文

人称・性・数表示子

一要素名詞述語Rh文

有動詞Th-Rh文: 名詞Th-動詞Rh文

(現象・総称タイプ)

(省略IC付加タイプ)

(安定文法化タイプ)

(注) 太字は通用性、下線は汎用性を示す。?は制限的許容性、*は許容困難性を示す。

3. 1. 2. チェコ語一要素文・二要素文F S P構造の歴史的変化:

以下の一要素Th-Rh文を除き、他は概ね二要素分析的F S P構造への変化が観察される。

自然現象文: 一要素Th-Rh文への収斂

nesšćilo tři léta a měsíecóv šest. -Drážď. (XIV)

Cf. déšť by nedštil. /有動詞Th-Rh文/* -Ol. (1417)

身体精神状況文: 一要素/二要素文の両立

když ženu bolí k dietěti. -ŽaltPod. (1396)

Cf. v těch časech poče Nera břicho boleti. -Pas. /有動詞Th-Rh文/

総称人称文: 人称形 > 非人称再帰形

by na lov v hojněj čsti jěna. -LegPil. (14世紀前) 複合分析受動形\

=jelo se na lob v hojně nádheře. 非人称再帰形/* /属格非人称\

vložichu jej v rov. -Hrad. (XIV中) 男性三人称複数活動体形\

一要素名詞述語Rh文:

名詞文: juž čas mně všu [čiši] vypiti. Dal. =je čas ...

- ..., polehčeváše se Saulovi a lehčejie jemu býváše, neb ... -Ol.
 ..., i posilováše se Saul a lehčejie mějieše, neb ... -Pad.
 ... a polepšováváše se Saul, a lehčeji mieváše se, neb ... -Práž.
 ..., a občerstvoval se Saul, a lehčeji mu bývalo, nebo ... -Melan.
 ..., i mívál Saul polehčení a lépe mu bývalo, nebo ... -Kral.
 ... a občerstvován býval Saul a lehčeji se měl, nebo ... -Svato.
 ... Saulovi to přinášelo úlevu a bylo mu dobře, ... -Ek.

解釈：lehceji(より楽に)+mu(彼に)+bylo(なった)/一要素非人称/>lehceji+se měl(気分が~になった)/二要素人称/
 Ph, Rh Set. Th +; Pr, Tr Q, Rh (Th-)+; AofQ, Tr (XV中)

一要素文の二要素文化およびTrPr要素とTh/Tr/Rh要素の形式的分離が観察される。

3. 2. モダリティ付加によるF S P構造の変化

3. 2. 1. F S Pマイクロ構造としてのモダリティ

文のTh-Rh構成に関与的である部分としては、上記の陳述が一般的かつ本来的であるとされている。つまり、発話から話者の特徴を消去もしくは薄めた文型（または論理学の命題）に相当する部分、換言すれば事実描写的な部分が、伝達機能を主に担っているという文法感が一般的である。しかし、発話としての文には、他にも伝達機能を義務的・意図的に担っている部分があると考えられる。それは、話者の感情（文の喚情性）に関与的な部分としてのモダリティ要素である。それ自体は、形式的にも機能的にも自律的な文構成力がなく、陳述や（聞き手を含む）発話状況に対する感情・態度を表わし、それらの構成に付加的に関与するものと見なされている。他方、これら話者の態度・感情などは、発話構成の際、意図的であるなしに拘らず、別の伝達機能を持つと考えるべきである。なぜなら、あらゆる発話は、聞き手・読み手に届いた段階で、その生産者である話者の特徴が、有標・無標に拘らず、（イントネーションなど非言語形式をも含め）反映されているからである。もしそれが正しければ、モダリティ形式自体も（一次形式としての陳述に付随した）二次的Th-Rh構成に関与的な文部分と見なすことが可能である。既にHonjo(1997)で触れたような喚情的F S P構成が、このことを裏づけており、主観的モダリティを含む多様なバリエーションの存在が、話者の感情（つまり陳述の喚情性）の伝達機能的側面を反映しているのである。二次的Th-Rh構成は、陳述に付加・挿入されたマイクロ構造を持つと想定され、形式的には法助動詞や様相副詞（文副詞など）や、さらに時制・モダリティ表示子（TME）としての意味カテゴリー担う定動詞活用語尾などに、機能的には無標のTrPr要素の中に、固有の伝達場を持つと考えることが可能である。これらは、所謂モーダル・マイクロ構造、モーダル伝達場、さらにその構成原理はF M P (Functional Modal Perspective)と呼ぶことが可能であり、有標F S P原理としてのE S P (Emotional Sentence Perspective)との統合が筆者により試みられている。話者パースペクティブを持つ理論として今後

の練磨が期待される。

チェコ語の文タイプ分類Ⅱ：話者の（伝達内容に対する）態度による分類

文タイプ（≒文型）

/話者の態度/=モダリティ:	義務的モダリティ（＝ムード）	自由モダリティ	
/Th-Rh/性:			
平叙ムード	疑問ムード	命令ムード	義務／必要／当然／
=直説法	=疑問詞・IC	=命令法/命令小詞+直説法	可能／許可／欲求など
		at'+直説法	být+不定詞
		(祈願ムード = 条件法/kéz+接続法)	法(助)動詞・述語・副詞・形容詞+不定詞
平叙（／否定）文	疑問文	命令文（祈願文）	?喚情文
(抱合タイプ)	(付加タイプ)	(φタイプ)	(自由付加タイプ)

3. 2. 2. チェコ語モダリティ F S P 構造の歴史的変化

Ad-hocなムード表示子としてのzda(li)(>což-pak)やat'/necht'+直説法の登場や、自由モダリティ表示子としての法(助)動詞+不定詞や法述語・副詞・形容詞+不定詞の発達により、分析性を増し、その結果形態上もTr要素からTr要素の分離独立が可能となったことが観察されている。

平叙文（／否定文）:

otka vypusti z sebe pět pramenův a z nich prokvíte pět ořechův. -Dal. (XIV初)

疑問文: kak, kaký, jak, jaký (XV-XVI); poč-proč; -li/-l, či, zda(li) > což-pak

kakú omluvu nesete proti člověku tomuto? -EvZim. (XIV後) 如何なる~?

命令文（祈願文）: at'/necht'+直説法; ké(ž)+直説法/条件法

i vecě jemu: a kéž ste mne zavolali! -Otc. (XIV後) ~でありさえすれば!

být+不定詞(<古スラブ語): \ bieše viděti slziece. -LegKat. (1400)=bylo možno vidět 可能

法(助)動詞+不定詞: / mítí, moci, chtietí<古スラブ語; musietí<ドイツ語 müssen, směti(敬えて~する)

to musí býti sirá duše, ješto za ~ kněžím nedal. -Chelč. (1434)=jistě je 確実性

法述語・副詞・形容詞+不定詞: / (ne)lžě, (ne-, po-)třeba, potřebie<古チェコ語; nutno, dlužno<現代チェコ語

již téhož netřeba jest druhé psáti. -Štit. (XV後) 不必要

モダリティ F S P 構造の分析モデル:

モダリティ表示のための多様な形式（つまり文法手段）を、話者の態度を伝達する機能という観点から分析することは、それらに対する F S P 役割（つまり Th, Tr, Rh）付与の可能性を探り、各 F S P 要素が発話の発展に如何に寄与するのかを発見することにより可能となると考えられる。換言すれば、発話としての文の機能的構成（F S P）を可能にする種々の（モダリティもその一つと見なされる）機能的要素は、それらの形式的手段の機能の多様なバリエーションの分析を通してのみなしえろという認識である。以下の例で明らかのように、様態副詞 + TME の無標使用が TrPr/TrPro という F S P 役割を担い、それ以外の部分つまり事実陳述部分（には付随するが、しかしそれ）とは別の比較的独

立した伝達場を構成しているという見方である。話者の態度が、話言語では主にイントネーションで、書き言語では種々の法（助）動詞や小詞・間投詞やさらに様態副詞などで具体的に表示され、しかもそれらが陳述部分（特に主語）と形式的呼応関係を持たないという文法的事実が、このモダリティ伝達場の存在を保証している。

タイプ3：Qスケールに対応

Jan jistě přijde do Prahy. (<Jsem si jist o tom, že Jan přijde do Prahy.>)

分析：Jan jistě přijde do Prahy.

動詞マイクロ構造：

B, DTh

+;TrPro

+;TrPr;Q, Tr

Sp, RhPr : 動詞メゾ構造

PARALLELISM

MB, ThPr; MQ, Tr

MSp, Rh

(Jsem si jist) o tom, (že Jan přijde do Prahy)

+;B, ThPr, AofQ, TrPr ThPr Q, Tr Sp, R()

(+;TrPro B, DTh +;Q, Tr Sp, Rh)

タイプ4：Phスケールに対応

S překvapením, přihodil se mu včera neštěstí. (<Překvapilo mě, že ~.>)

分析：S překvapením, přihodil se mu včera neštěstí.

MB, Rh

MPr, Tr

Pr, TrPro

+;Pr, Tr Pr, TrPr Set, ThPr Set, ThPr Ph, Rh

PARALLELISM

MQ, Ph; +;MPr, Tr; MSet, ThPr

(Překvapilo mě) (že se mu přihodil včera neštěstí.)

Ph, Rh+;Pr, Tr Set, ThPr Sp, RhPr()

(+;TrPro Set, ThPr +;TrPr Pr, Tr Set, ThPr Ph, Rh)

(注) 網掛の部分はモーダル意味カテゴリーを示す。

MB: Modality Bearer (=話者)

MPh: Modal Phenomenon

MQ: Modal Quality

MPr: Modal Presentation

MSp: Modal Specification

MSet: Modal Setting (=話者)

歴史テキスト資料平行分析：

ムード>自由モダリティは、話者態度の間接表示から直接表示への傾向と平行的である。

② 1 Samuel 16.6

„Azda jest již před Hospodinem Kristus ...?“ -Ol.

„Zdali před Pánem jest pomazaný jeho?“ -Pađ.

„Tento-liž bude králem?“ -Práž.

„Zdali před Pánem jest pomazaný jeho?“ -Melan.

„Jistě před Hospodinem jest pomazaný jeho?“ -Kral.

„Zdali před Pánem jest pomazaný jeho?“ -Svato.

„Jistě tu stojí před Hospodinem jeho pomazaný.“ -Ek.

解釈：疑問モダリティzdali-?>確定性モダリティjistě(XVII前) Cf. Jan 6.14 Opravdu/jistě/zajisté

話者態度を示す法副詞の発達およびTrPr要素の機能的分化が観察される。

3. 3. 意味・文脈的要因により特徴づけられた文(テキスト)のF S P構造

文の形式的構成は、現実の発話文脈の中で、Th-Rh構成の要件に対応するべく一定の範囲での修正をうける。第3節に論じたような文型のバリエーションの存在が、そのような体系の存在を示していると考えられる。通常は、そのような文脈条件の強い影響下で、発話のF S P構成がなされているが、比較的稀なケースとして文脈条件の極めて弱い、またはゼロでの場合が想定される。前者の条件下にある文は通常インスタンス文(または唯一要素以外全てを文脈依存とする強い文脈条件にある文は2次的インスタンス文)(文脈依存文)、後者の場合の文は基本インスタンス文(文脈独立文)と呼ばれている。文脈依存文のF S P構造は、既に前節で扱われたので、ここでは文脈独立文のF S P構造の分析を試みることにする。具体的には、フィルバスの文脈独立意味スケール2種(P hスケールとQスケール)をチェコ語訳聖書テキストの物語冒頭文の中に検証する。

文脈独立文のF S P構造(Pスケール/Qスケール/Ph-Q統合スケール)：

③ Skutky 27.23：／挿入部で出現：Phスケール／／部分的文脈独立／

(+末尾埋め込みQスケール文)

Neb mi se jest zjevil této noci anděl boží, jehož já jsem ... -Drážď.

Neb mi se jest zjevil této noci anjel boží, jehožto já jsem ... -Ol.

Neb mi se jest okázal této noci anjel boží, kteréhožto já jsem ... -Práž.

Neb mi se okázal této noci anjel boží, jehožto já jsem ... -Melan.

Nebo této noci ukázal mi se anděl Boha (toho), jehož já jsem ... -Blah.NZ.

Nebo této noci stál u mne anjel boží, jehožto já jsem ... -Svato.

Dnes v noci ke mne přišel anděl od Boha, kterému patřím ... -Ek.

解釈：Set1, Th Set2, Th +; Pr, Tr Ph, Rh Sp, RhPr=b, th +; q, tr

所有形容詞boží>前置詞od Boha;接続詞+前置詞>接続詞+文頭語+前置詞⇒Pr-Set1-Ph(XVI後)>Set1-Pr-Ph

文頭Set1(時間副詞)を含む語順の相対的F S P化および関係詞による融合的統合スケールへの傾向が観察される。

④ Genesis 1.1-2：／存在・出現：Phスケール／／絶対的文脈独立／

V počátcě stvořil Buoħ nebe i zemi.

Ale země byla neužitečná a prázdňá a tmy biechu nad tvářǐ propasti
a duch boží nášieše sě nad vodami. (I povědě Buoħ: ...) -Drážď.(1360)
Na počátcě stvořil Bóħ nebe i zemi.

Ale země byla neužitečná a prázdňá a tmy biechu nad tvářǐ propasti
a duch boží nosieše <sě> nad vodami. (I povědě Bóħ: ...) -Pad.(1432-35)
Na počátku stvořil Buoħ nebe i zemi.

Země pak bieše neužitečná a neplodňá, a tmy biechu po vrchu propasti.
A duch Páně vznášel se nad vodami. (I řekl Buoħ: ...) -Praž.(1488)
Na počátku stvořil Buoħ nebe i zemi.

Země pak byla nenesoucí užitku a prázdňá a tmy byly na vrchu propasti
a duch boží vznášel se nad vodami. (I řekl Búħ: ...) -Melan.(1577)
Na počátku stvořil Búħ nebe a zemi.

Země pak byla nesličňá a pustá a tma byla nad propastǐ a Duch boží
vznášel se nad vodami. (I řekl Búħ: ...) -Kral.(1613)
Na počátku stvořil Búħ nebe a zemi.

Země pak byla nenesoucí užitku a prázdňá a tmy byly nad tvářǐ propasti
a duch boží vznášel se nad vodami. (I řekl Búħ: ...) -Svato.(1715)
Na počátku stvořil Búħ nebe a zemi.

Země byla pustá a prázdňá a nad propastnou tůni byla tma. Ale nad
vodami vznášel se duch Boží. (I řekl Búħ: ...) -Ek.(1979)

解釈: tma byly nad ~ (XVIIまで) > nad ~ byla tma (XX以降)

Ph, Rh +; Pr, Tr Set, Th Set, Th +; Pr, Tr Ph, Rh ⇒ Ph-Pr-Set > Set-Pr-Ph
duch vnášel se nad ~ > nad ~ vznášel se duch 同様の变化

語順の F S P 化および接続詞の発達による並列的統合スケールへの傾向が観察される。

- ⑤ Jan 6.1-4: / 属性 + 存在・出現: 分離スケール / / 相対的 (時間的) 文脈依存 /
(Qスケール+Phスケール)

Šel Ježúš za moře Galilee, jenž slóve Tiberiadis, cf. Zjevní 19.1
a jdíeše po něm síla veliká, nebo vidíechu divy činiece na těch, jež
nemocni biechu.

Tehdy jide na horu Ježúš <a tu sedieše s učenniky svými>.

Bieše bliz velikonoc, den hodný židovský. ... -Seit.(1380)

.....

Potom odešel Ježíš na druhý břeh Tiberiadského jezera v Galileji.

Šel za ním velký zástup, poněvadž viděli znamení, která činil na nemocných.

Ježiš vstoupil na horu a tam se posadil se svými učedníky.

Byly blízko židovské svátky velikonoční. -Ek. (1979)

解釈: potom odešel J. na ~. Šel za ním zástup. J. vstoupil na ~.
Set, Th +;Q, Tr B, Rh Sp, RhPr +;Pr, Tr Set, Th Ph, Rh B, Th +;Q, Tr Sp, Rh
byly blízko svátky ⇒ Set-Q-B || Pr-Set(=B)-Ph || AofQ-Q-B(≠Ph)
+;AofQ, TrPr Q, Th<Rh B, Rh<Th 属性→出現の意味的ギャップ B≠Phによる非統合スケール
テマ化 レマ化 (時間の停止) (論道・補足など)

稀な文体的有標のケースとして意味的不連続を表わす分離スケールが観察される。

4. 結論

チェコ語の歴史的変化において、以下の特徴が観察された。

- (1)一要素文の二要素文への傾向は、TrPr要素とTh/Tr/Rh要素の形式的分離を実現した。
 - (2)自由モダリティの発達は、TrPr要素における話者表示機能の分化を実現しつつある。
 - (3)文脈独立での統合スケールの保持は、今なお相対的自由語順により保証されている。
- これらの特徴から、チェコ語 F S P 構造における非TrPr要素（陳述部分）とTrPr要素（叙法部分）の機能的・形式的分離の傾向を認めることが可能である。

参考文献:

Bauer, J. (1972): *Syntactica slavica*, Universita J.E. Purkyně v Brně, Brno.

Firbas, J. (1992): *Functional sentence perspective in Written and spoken communication*, Cambridge University Press, New York.

Honjo, J. (1997):「西スラブ語の情緒構文: F S P と E A S P (喚情態度的文構成)のダイナミズム」西日本言語学会第27回研究発表会ハンドアウト。

Karlik, P. & A. Svoboda (1982): *Skladba češtiny pro cizince*, SPN, Praha.

Kyas, Vl. (1997): *Česká bible: v dějinách národního písemnictví*, Vyšehrad-Praha.

Lamprecht, A., D. Šlosar & J. Bauer (1986): *Historická mluvnice češtiny*, SPN-Praha.

辞書:

Slovníček staré češtiny (ed. by F. Šimek), Verlag Otto Sagner, München, 1981.

出典:

Dražď. = Dražďanská bible (1360) Seit. = Seitenstettenský evangeliář (1380)

Ol. = Olomoucká bible (1417) Pad. = Padeřovská bible (1432-35)

Praž. = Pražská bible (1488) Blah. NZ. = Blahoslavův Nový zákon (1568)

Melan. = Melantrichova bible (1577) Kral. = kralická bible (1613)

Svato. = Svatováclavská bible (1715) Ek. = Bible - Ekumenický překlad (1979)

その他の出典は Lamprecht et al. (1986)参照